

悪女

～愛のためなら悪女にもなれる～

序章

忘れもしない。この日は、朝から非常に暑かった。

品のいい純白のシフォンワンピースに身を包み、自慢の長い黒髪をハーフアップにした倉原白花は、たおやかな着物姿の母に続いて、黒塗りの車の後部座席に乗り込んだ。

前方の車には、白花の父、清十郎が複数の警護官と共に乗っている。

雲ひとつない青空の下は、アスファルトも揺らめくかんかん照り。だが、運転手が気を利かせてくれていたらしく、車内はひんやりと涼しかった。

「白花、もっと奥に詰める」

あとから来た兄の清一に文句を言われて、白花はその真つ白な頬を餅もちのようにぶくつと膨らませた。国産セダンの中でも最高クラスということもあって車内は広いが、それでも後部座席に三人並ぶと圧迫感がある。ぎゅうぎゅう詰めになって、せつかくドレスアップした装いが崩れるのがいやだったのだ。

「ええっつ、お兄様もこっちの車に乗るの？ お父様と一緒に乗ればいいのに。向こうのほうが人数少ないんだから」

「ムリムリ。SPの体格舐めんよ。後部座席なんて二人で満席だって」

「じゃあ、助手席に座ってよ」

「車の席次は後部座席が上座だ馬鹿。それでも政治家の娘か」

辛辣しんらつというよりは軽口かみせといった調子で、清一が宣たまう。彼は白花と顔を合わせるたびにからかってくるのだ。白花はこの兄に何度泣かされたかわからない。

清一が銀座ぎんざの老舗らひせテーラーで仕立てたオーダーメイドスーツのジャケットのボタンをサツと外して隣にどっかりと座ったものだから、案の定、彼の尻にスカートの裾すそを踏ふんづけられて、白花は頬を膨ふらませるだけではなく、眉間にまで深々しんしん皺しわを寄せる羽目になった。

「もうっ！ スカート踏まないでっ！」

「ああ、悪イ悪イ」

微塵みじんも悪いとは思っていないのだろう。清一はまったく尻をどけてくれない。

仕舞いには母親に「二人とも騒がしいですよ」と注意されて、白花はムツと唇を引き結んだ。

財務省が大蔵省と呼ばれていた時代から大臣を歴任し、官房長官まで上り詰めた政治家、倉原清一郎の長男として生まれた清一は、倉原家の王子様なのだ。

その王子様は本日、清一郎の地元後援会が主催する“官房長官就任祝い”のパーティーで、清一郎の後継者として正式にお披露ひびろ目めされることになっている。

母も白花もそのパーティーに出席するため、こうしてめかし込んでいるのだ。なのにこの王子様ときたら、もう二十七にもなるくせに、八つ年下の妹が懸命にスカートを引っ張る様を嘲笑あざわらっ

るんだから、まったくもってしょうがない。
(お兄様の意地悪いぢあくっ……早くどいてよ！ 巧たくみさんなら絶対にこんなことしないだから！)
母親に注意された手前、心の中で苦情を訴えながらもスカートを引っ張る。

「あ、巧」

「えっ！」

兄の声に弾はじかれたように顔を上げると、モダンな異人館を思わせる倉原邸の玄関前で、白花達兄妹の幼馴染みである広瀬巧ひろせたくみが、彼の父、彰あきら氏と向かい合っあってなにかを話しているところだった。

一八〇を超える長身で、落ち着きのあるブラックスーツを着こなし、清潔感のある短い黒髪。整った顔立ちに、シックで品のいい眼鏡。その眼鏡の奥の目は切れ長で、しかもとっても優しく細まっている。この巧の父親である彰氏が、白花らの父親、清一郎の第一秘書なのだ。

彰氏と清一郎は、清一郎が政治家として初出馬する前からの仲で、旧帝大時代の同級生なんだとか。そして偶然にも、巧と清一も同級生で親友。

清一が父親の跡を継ぐように、巧もまた、父親である彰氏と同じ政治家秘書を志あつしている。

将来、清一が出馬した時に第一秘書となるべく、現在は清一郎の秘書として経験けいけんを積たんでいる最中なのだ。

父親同士の関係もあって、巧は白花が生まれる前から倉原邸に出入りしていたし、実の兄が意地悪なものだから、白花は昔から優しい巧によく懐なついていた。彼も実の兄以上に、白花のことを可愛がってくれていると言える。

そんな巧に、白花が恋心を抱くようになるのも自然なこと——

（巧さん……はう〜やっぱり素敵……あつ！）

見蕩れていたところに巧とバチツと目が合つて、つい今しがたまで膨れていた頬がぽつと花咲く。踏まれたスカートを引つ張るのも忘れて白花が小さく手を振ると、爽やかに微笑んだ巧が車に寄つてきた。

「白花さん。いつも可愛いけど、今日は特別可愛いね。それ、新しいワンピースでしょ。よく似合ってるよ」

清一の膝に身を乗り出して窓を開ける白花に、腰を低くした巧が顔を覗かせる。

「そ、そう、ですか？」

巧にちよつと褒めてもらえるだけで、白花はもう夢見心地だ。はにかみながらも、自分が一番可愛く見えるように上目遣いなんてしてしまう。

「よかつたなー白花。及第点だつてよ。朝から必死こいてめかし込んだ甲斐があつたな」

「も、もう！ お兄様の意地悪！」

兄の言い方は辛辣だが、それは間違いない事実。だからといってそれを、巧の前で言わなくつたつていいのに！

「ははは！ じゃあ、意地悪なお兄様の本音を教えてあげる。ほら、清一が朝から俺に送つてきたメッセ見てみて」

「あ！ おま、それはナシ——」

慌てる清一を押しつけて、巧が差し出すスマートフォンを見ると、開かれたトーク画面に『俺の妹がマジで可愛いんだが？』と書かれており、いつの間撮ったのかメイクアップした白花が鏡に向かつてピアスを着けている写真まで送られている。送信アカウントは間違いない清一。

「おーにーいーさーまあー？」

得意気な顔で兄を見上げると、一瞬のうちに両手でぐりぐりつと頭を掻き回された。

「あー可愛い、可愛い！ ホント！ マジ可愛い！ 白花は天使！」

「キヤーツ！ 髪が！ 髪が！」

頭を鳥の巣にされて、車が揺れるほど悲鳴をあげる。この兄の可愛がり方は本気でどうにかしてほしい。

白花がむくれると、窓越しに優しい手が伸びてきた。

「大丈夫、大丈夫。俺が整えてあげる」

巧のあたたかい手が、柔らかに頭を撫でながら髪を梳いて、乱れたスタイルを直してくれる。最後にツンツンと頬を指先で突かれて、「可愛い」と魔法の言葉をもらったら、白花の気分は一気に上がった。

「ありがとうございます！ 巧さんっ！」

（大好き！）

白花が巧に華の笑みを向けている間に、彰氏が車の前を回って運転席に乗り込む。どうやら運転は彰氏のようなのだ。

「あれ、巧さんは？ 巧さんは一緒に来ないの？ あとから来るの？」

白花の疑問に答えてくれたのは清一だった。

「巧は父さんの事務所で留守番。誰か一人はわかる奴がいないと困るだろ」

「そっか……」

今日は清一のお披露目も兼ねているから、未来の第一秘書である巧も参加すると白花は勝手に思っていたのだ。だが、言われてみればそれも納得。

現在、清十郎には東京の議員会館に五人、ここ地元神奈川の本部事務所に十三名の秘書がいる。裏を返せば、巧はその秘書らの中でも、留守を任せられるほど優秀、ということなのだろう。

ならば致し方ないと、白花は不満を呑み込んだ。

白花が毎度パーティーに駆り出されるのは、結局のところお酌要員なのだ。母だけでは手が回らない。普段は父を応援してくれる後援会の重鎮達も、酒が入ればただのセクハラおやじと化す。まだ未成年なのに、酒を勧められることだってある。そこをさり気なく助けてくれるのが巧なのだ。

「ごめんね、白花さん。そういうことで、今日は側にいられないんだけど……。酔っぱらいのおじさん達にセクハラされたら、すぐ逃げるんだよ。お母様か清一の側から離れないように。無理なくっていいんだからね」

「大丈夫です、頑張ります！ 巧さんも頑張ってくださいね！」

巧に励ましてもらえれば、それだけで白花は百人力だ。セクハラおやじもなんのその！

席次もお酌の順番も暗記しているし、完璧にこなす自信がある。伊達に政治家の家に生まれちゃ

いないのだ。

「お待たせしました。では出発いたしますよ。シートベルトをお締めくださいね」

彰氏に言われた通りにシートベルトを着用してから、白花は「行つてきます！」と巧に手を振った。そうしたら「いつてらっしゃい」と、手を振り返してもらえぬ。

清十郎を乗せた車に続いて、白花達を乗せたこの車も滑らかに動き出した。邸と巧がどんどん小さく遠くなっていく。

「——つたく、おまえは巧、巧つて。巧に惚れてるからつてあからさますぎ」

「~~~~~っ！」

すっかり巧の姿が見えなくなつてから、清一が苦笑いをしてくる。

（巧さんのお父様がそこにいるのにつ！ お兄様つたら、やめてよお！）

自分の想いをバラされた白花は赤面するしかない。茹で蛸になった妹を横目で見ながら、清一はニヤリと笑つて父親そっくりの顎をさすつた。

「ま。おまえは一応、この俺の大事な妹だからな。信頼の置ける男にじゃないと嫁にはやれん。その点、巧なら合格だな。なにせ俺の親友だ。白花、巧ならおまえを嫁にやつてもいいぞ」

「お、お兄様……！」

意地悪な兄にかかわれているのだと頭ではわかっているのに、真に受けた心臓がバクバクする。「広瀬のおじさん。うちの白花を巧の嫁にどうですか？ お転婆ですけど、器量はいいですよ」

急に話を振られたにもかかわらず、彰氏はにこにこ柔らかな顔で微笑んだ。

「そもそも、大歓迎ですよ。巧も喜びます。巧は昔っから、白花お嬢様一筋ですからねえ」
「っ!!」

彰氏から巧の気持ちを聞かされて、白花は喜びに目を剥いた。
(巧さんがわたしを!?)

実を言うと、見つめれば目が合い、微笑めば微笑みが返ってきて、手を振れば振り返してもらえるものだから、「もしかして両想い?」だなんて自分に都合のいいことを考えたのも一度や二度じゃない。でも期待に胸が膨らむたびに、「自意識過剰なのでは?」と心配になって、告白する勇気が持てないでいたのだ。

それが、本当に両想いかもしれないなんて!

興奮したまま左側の兄を見て、今度は右側の母親を見ると、クスツと笑われてしまった。

「白花は本当になんでも顔に出るわねえ。お父様もね、巧さんならって仰もちっているのよ」

「本当に!？」

白花は思わず声を上げた。

父、清十郎が乗り気なら、これはもう決まったも同然では?

ますます色付く白花を見て、母は「ほほほ」と上品に口元に手をやった。

「まあ、あなたはまだ十九ですから。結婚はもう少し先のお話ですけどね」

「母さん、母さん。二人は付き合ってますらないんだ。だいぶ先の間違いでしょう」

横から清一の軽口が飛んできたが、白花にはもう聞こえていない。

(わたし、巧さんに告白してみようかな……)

自分で言うのもなんだが、今日のメイクはかなりバツチリ決まっている。理想的なつや肌になったし、アイメイクも大人仕様。髪だつてサラサラだ。このマキシワンピースも結構似合っているはず。いつもの一・五倍は可愛くなれているのでは!?

一番可愛い自分である時なら、告白する勇気だつて持てる気がする。

(うまくいく、かな? きゃああ〜っ! 巧さん、夜は事務所から家に来てくれるかな? 忙しいかな? どうかかな? ああ、でも、会いたいなあ)

ついさつきまで顔を合わせていたくせに、そんなことを思う。白花がソワソワしているうちに、二台の車は続いて有料道路へと入った。

父、清十郎の地元後援会の皆さんが用意してくれた会場は、神奈川県やまての山手やまてにある老舗ホテルだ。倉原の家からこの有料道路を使えばほんの二十分ほどで着く。

片側二車線、車の流れはスムーズだ。

白花はポーチからコンパクトを出して、白い小花の髪飾りの位置をミリ単位で微調整した。

巧は会場にいらなくても、白花の頑張りや彰氏や他の秘書からも伝わるはずだ。いや、ぜひとも伝えてもらわなくては。お勤めを果たす気合いが入るといふもの。

そんな中、隣に座っている清一が、運転手と助手席の間から身を乗り出すようにして、彰氏に話しかけた。

「広瀬のおじさん。やっぱり官房長官は違いますか? 大臣より忙しい?」

「それはもう！ 三倍、いや、五倍は忙しいですね。通常国会は先週閉会しましたが、来年度の予算編成のための作業もありますし、なによりほら、豪雨災害がありましたからね」

「ああ、あれはひどかった。まだ復旧には時間がかかるんでしょう？」

「そのようですね。だからじゃないですが、先生は休む間もありませんよ。清一さんも、今日の会で万歳やらしてはいけませんよ」

ルームミラー越しに第一秘書の顔をチラリと覗かせて、彰氏がアドバイスをしている。清一は父を官房長官にまで押し上げたこの第一秘書には一目置いていうようで、素直に頷いた。

「はっ！ 代議士に休みなし、か」

「清一さんが当選なさったら、その時が先生の夏休みですよ。先生も奥様とご旅行に行かれるのを楽しみに——」

「っ！ おじさん前、前、前!!」

(? なに?)

突然上がった兄の大声を不躰に思いながら白花がコンパクトから顔を上げると、中央線を大きくはみ出した白の対向車が白花達目掛けて一直線に突っ込んできているではないか。

視界いっぱいに対向車の運転手の顔が広がって、知らないその人と目が合ったような気がした。

「やばい、やばい、やばい！」

「うわあああ！」

同じことを繰り返す兄と、普段穏やかな彰氏の初めて聞く悲鳴、そしてパ——！ っと鳴り響く

クラクションに釣られるように、「キヤーツ！」と喉から甲高い声上がる。

(怖い！ やだ、助けて！)

ジェットコースターの急降下時に似た重力を感じて、白花は思わず目を閉じた。

身体がおもいつきり左側に流されて、ドゴン！ という鈍い音と共に、上からおそらく母の身体と思われるものがのし掛かってくる。

なにが起こったのかさえ理解できぬまま、身体が浮き上がる感覚と、押し潰される矛盾を同時に味わい、大きくバウンドして息がとまる。

そして次の瞬間、背中側からなにかを叩きつけられた衝撃で、白花の意識はバチンと飛んだ。



「う……………」

キーンとした耳鳴りの中で、白花はうつすらと目を開けた。瞼が全部開かない。それでも入ってくる光は眩しくて、ふたたび目を閉じた。

口の中になにか管のようなものが突っ込まれている。それが不快で取りたくてもがいたが、身体が思うように動かない。

(……………なに、これ……………どこ、ここ……………)

もう一度目を開けると、今度は目の前にマスクを着けた女性の顔があつて、白花の焦点を攫った。

「倉原さん、わかりますか？」

その声に反応して微かに呻き声を漏らせば、その人の目が安堵したように柔らかくなった。

「今、先生を呼んできますからね」

先生——聞き慣れたそれが、初めは父のことを指しているのだと思った。だが来たのは、また知らない女性。白衣姿のその人を見て、ここが病院だと白花はやっと気付いた。

あれこれと診察をされているうちに、だんだんと記憶の断片が甦ってくる。事故に遭ったのだ。

対向車線をはみ出してきたあの車と衝突したのだろうか？ 思い出そうとしたけれど、それは無理だった。

(……でも、いきてるんだ……よかった……)

自分の身になが起こったのかはわからなかったが、生きてることはわかる。身体が痛くて動かないのは、骨折でもしているのだろうか。

念入りの診察を受けて、やっと口から管を抜かれた白花は、からからになった喉から声を振り絞った。

「……おかあさま、と、おにいさま、ひろせの、おじさま、ぶじで、すか……？」

「……………」

女医は眉間に皺を寄せると、一度目を閉じて、ゆっくりと開けた。

「大変な事故だったんです。今は身体を治すことに専念しましょう」

彼女は白花の左手を撫でるように叩いて、その場を離れた。

意識が戻った一週間後、白花は集中治療室から一般病棟の個室に移された。

臨時国会がはじまり、忙しい清十郎に代わって白花に付き添ってくれたのは、母方の叔母だ。

そして白花は彼女から、事故からすでに二週間が経過していることを聞かされた。ずっと昏睡状態だったらしい。

白花達を乗せた車は、中央線をはみ出してきた対向車を避けて左に急カーブ。その拍子に横転。そのまま後続のトラックに激突され、大破、炎上。

車を包み込んだ炎はすぐに消しとめられたが、彰氏と、運転席の真うしろに座っていた母は後続車両の衝突により即死。

助手席の真うしろにいた兄の清一は、車が横転した際、一番地面に近い場所にいたのが悪かったのか、火傷を負いながら全身を強く打って事故の三時間後に死亡。

清一に、どの段階まで意識があったのかはわからない。だが炎上する車体から白花が救出された時、白花は彼に抱きしめられ、護られる形だったという。

「……………」

ベッドに仰向けになったまま、白花はただ放心していた。

綺麗で優しくて、上品だった自慢の母。白花をなにかとからかいながらも、構い倒してくれていた兄。子供の頃から家族ぐるみの付き合いで、もう一人の父のような存在だった彰氏。

その三人がもうこの世にいないだなんて……

叔母の話では、白花が昏睡状態にある間に、すでに三人の葬儀は終わったのだそうだ。

遺体も見えていない、葬儀にも参加していない、骨すら拾っていない。そんな状態で、信じることも受け入れることもできなかった。

そして、今の自分の状態も――

全身打撲。右脛骨プラトール骨折。そして深達性Ⅱ度熱傷。車が炎上した際、ガソリンの燃えた有毒ガスを大量に吸った白花は、一時は命も危うかったらしい。

だが生き残ったものの、白花の身体は右肩から右胸にかけての広範囲に、深い火傷を負っていた。顔と左半身が無事だったのは、兄の清一が白花の頭を包み込むように護ってくれていたからだ。

それでも自慢だった黒髪は一部燃えてチリチリになり、ガラスかなにかで切ったのか頬には大きなガーゼテープを貼られている。

焼け爛れた身体は、あまりのひどさに直視することすらできなかった。

全治六ヶ月。だが、火傷の痕は残る可能性が高いらしい。

(……なんで……? なんでこんなことになったの……?)

点滴の雫が垂れる様を、虚ろな目で見つめる。

なんにも悪いことなんてしていない。白花達はただ、車に乗っていただけだ。いつもと同じ。

ハンドルを握っていた彰氏は、無事故無違反の優良運転者だし、事故なんてあり得ない。

すべて嘘なんじゃないか?

(そうよ……きつと嘘。わたし、夢でも見てるんじゃない……?)

次に起きた時、この悪夢から醒めることを願って目を閉じる。

そうしてしばらくすると、コンコンと病室のドアがノックされて、誰かが入ってきた。看護師だろうか?

席を立った叔母が「お疲れ様です」と挨拶しているのを聞くとともになしに聞く。

訪れた人はどうやら、父、清十郎のようだった。

政治の世界には、金婦火来という言葉がある。衆議院は火曜にはじまり金曜に終わるので、代議士は金曜に地元へ帰り、火曜に東京に来るという意味だ。

東京から地元神奈川まで片道四十分と少し。日によっては一時間かかる。往復の時間を無駄にしないためにも、東京の別宅に寝泊まりする日がほとんどなのだ。

地元へ帰ってきた週末、清十郎は白花に会いに来てくれる。

集中治療室での面会時間は三十分と決められていたが、今日は一般病棟に移ってはじめての週末。清十郎もいつもより長くいてくれるかもしれない。

叔母はよくしてくれるが、やはり父が来てくれると安心する。

「白花。具合はどうだ?」

声と同時に、ベッドを囲っていたカーテンが開けられる。

まだ疼く火傷のひきつれをこらえて、白花は上体を起こした。

「お父さ——」

口を開きかけた白花は、父のすぐうしろにいる人の顔を見た途端、言葉を失った。

そこにいたのは、黒いスーツ姿の巧だった。

憧れ、幼い頃から恋心を抱き続けた人。

その人はヒマワリと淡いイエローの小花をカスミソウと共にあしらった花束を持ち、白花を見て痛ましそうに目を伏せると、深々と頭を下げた。

「白花さん——」

「いやあああああっ!!」

一気にパニックに陥った白花は、悲鳴を上げて巧に背を向けた。

「見ないで！ 出て行って！ いやだ、お願い、お願いだから見ないで！」

悲痛な声をあげながら泣きじゃくり、折れた脚にも構わず、逃げるようにベッドから降りようとする。

「危ない！ 白花、落ち着け！ 白花！ どうしたんだいきなり！」

「白花さん暴れては駄目よ！ 傷が！」

清十郎と叔母が宥めようとするが、必死な白花にはまったく聞こえていなかった。

見られたくなかった。

やけと怪我で醜くなった今の自分を、他の誰でもない、巧にだけは見られたくなかったのだ。

(いやだ、いやだ、いやだ——！)

白花がベッドから転げ落ちたのと同時に、勢いよく引つ張られた点滴スタンドが、ベッド側に倒れてくる。

だがそんなことにも気付かず、白花はベッド脇の床に崩れて、燃えてチリチリになった髪と、涙でぐしゃぐしゃになった顔を両手で覆った。

「……いやあ……」

白花はこの時知ったのだ。この悪夢が夢などではなく、紛れもない現実なのだということ。そしてその一方で、立ち尽くす巧がどんな悲痛な表情をしているかなど、知るよしもなかった。

第一章

三月最後の夜。

実家の二階にある自室でドレッサーの前に座った白花は、バスローブの前を緩めて鏡に自分の肌を映した。

女の象徴である丸い膨らみ。左側は張りのある白い肌。だが右側は……不自然な赤黒さとひきつれが貼り付いている。今が湯上がりというのもあるが、部分的に赤味が濃い。そのせいで色白部分との境目がくつきりと見える。それでも火傷の痕を消すために美容整形手術と放射線治療を繰り返

してよくなったほうなのだが、無傷の左胸と比べるとその差は歴然。自分でも目を背けたくなるが、こうして肌のチェックをするのは、もはや日課だ。

白花は大きなため息をついた。

母と兄、そして父の第一秘書の命を奪った事故から六年。白花は二十五歳になっていた。

あの事故で、右肩から胸にかけて負った火傷は、ケロイドと色素沈着となつて、今もなお白花の身体に残っている。骨折した右脚も、歩けるまでには回復したが、いまだに踏ん張りが利かない。事故当時大学二年生だった白花は、大学を三年間休学した。

名目は療養とリハビリ。でも本当のところは、外に出られなくなったからというのが正しい。

肉親を一度に二人も失い、生き残ったのは自分だけという負い目。そして身体に残る傷痕——それは十九歳の女の子が受けとめるには、あまりにも酷な出来事だったのだ。

そつとしておいてくれればいいものを、テレビや週刊誌は、現役官房長官の家族に起こった悲劇！と、センセーショナルに騒ぎ立て、人々はお茶請け代わりにそれを消費する。

自室に引き籠もりがちになった白花は、毎日泣いて、毎日絶望して、毎日『もう生きていたくない』と願っていた。でも、身を挺して護ってくれた兄を思うと、自分から死ぬことなんてできるはずもない。だから今も、こうしてのうのうと生きている。

表情をなくしたままケロイド部分に触ると、いびつな肌の盛り上がり、またため息をついた。

(明日……これを人に見られるのよね……いやだな……)
気が重い。

明日は白花の結婚式なのだ。

お相手は高辻蓮司たかつじれんじという今年三十一歳の若手政治家。父、清十郎が卒業した松平政経塾の後輩だ。弁は立つが、政治とは無縁の一般家庭に育った男で、知名度も地盤も皆無。だが、清十郎とは気が合うらしい。

清十郎は数年前、高辻蓮司を自らの後継者に指名した。

長年清十郎を当選させてくれた神奈川県第二十区から去年初出馬した高辻は、清十郎の手厚いバックアップの下、見事当選。早くも「ポスト倉原」なんて囁かれてるらしい。

彼は清十郎の後継者に指名された時から「倉原蓮司」を名乗っており、今回も「倉原蓮司」で出馬、当選しているくらいだ。

明日の白花との結婚で、正式に倉原家に婿入りすることが決まっている。だがそこに、白花の意志はない。

この結婚は、清一という後継者を亡くした清十郎が、新たに高辻という後継者を得るためのも——つまりは政略結婚だ。

「いやだ」なんて、白花は言えなかった。それが他の誰でもない、清十郎の希望だったから。

白花だって清十郎の娘なのだから、後継者として政治家になる未来も間違いなくあっただろう。

だが、あの事故から口数も減り、人目を避けて引き籠もるようになった白花に、政治家など務まるはずもない。

白花ではなく清一が生きていれば——

口さがない人はいるもので、それは白花の耳にも入っていた。

清十郎はなにも言わなかったが、事故後、明らかに酒量が増えたのは思うところがあつたからかもしれない。そして酒がたり、肝炎を患うようになってしまった。

父をそうさせてしまったのは間違いなく白花だ。

父から後継者を奪ってしまった罪悪感は計り知れない。

白花は清一に護られるのではなく、清一を護るべきだったのだ。それができなかったのだから、父のために父の新しい後継者と結婚することは、白花にできる唯一の贖罪。

(結婚、か……)

実感が無い。ケロイドからどけた手を、今度は髪に触れさせる。

事故当時と同じくらい伸びた黒髪を軽く指で梳いて、白花はドレッサーの上からブラシを取った。それで丁寧丁寧髪をとかず。

窓の外からは、霧雨のような気配がする。

この雨で結婚式が中止になってくれやしないかと、あり得ないことを考えていた。

(結婚するなら……巧さんと結婚したかったな……)

遠くに置いてきた初恋を思い出してため息をつく。

清十郎は去年政界を退いたが、巧は変わらず清十郎の秘書をしている。

あの事故から、白花と巧の関係はギクシヤクしたままだ。きつと、嫌われたのだと思う。

いくら自身に起こったことを受け入れられていかなかったとしても、せつかく見舞いに来てくれた

巧に対して、白花の態度はあんまりだった。

退院後、人目を避けて引き籠もっていた白花が大学に復学した頃、久しぶりに会った巧からは、すっかり笑顔が消えていた。

白花は自分のことだけで精一杯になっていたが、あの事故で亡くなったのは、なにも白花の肉親だけじゃない。巧の父親もなのだ。

聞くところによると、事故を取り上げたテレビ番組で、『運転手が急ハンドルを切らなければ、あんな事故にはならなかった』と言ったコメンテーターがいたらしい。

運転していた彰氏も亡くなっているのに、責めるなんてあんまりだ。

そしておそらく、直接巧にあれこれ言った人もいるのだろう。巧だって父親を亡くして傷付いていたのに。

彰氏が生きていれば、彼は家族を喪うことはなかった。清一が生きていれば、巧は華々しく清一の第一秘書になっていたはず。彼の人生は、今とは大きく変わっていたかもしれない。

それに、あの事故の唯一の生き残りである白花と接して、巧が愉快な気持ちになるとは到底思えない。巧に告白なんて、できるはずもなかった。

(でも……これからは頑張らないと……役立たずのわたしだが、やっと役に立つんだから……)

巧は今も清十郎の秘書だが、区切りがつけばいずれ清十郎の後継者——つまり、白花の夫の第一秘書になることが決まっている。それは巧がもともと得るはずだった地位だ。

白花がこの結婚を受け入れれば、すべてがまるく収まる。なら、受け入れない理由なんてない。

清十郎のためにも、巧のためにも——

でも傷付いた胸に残るのは、好きな人に愛されたかったという想いだ。

(馬鹿ね……こんな気持ち悪い身体……巧さんだっつていやがるに決まってる……)だから諦める。それが一番いいのだ。

高辻には事故のことも話している。

お見合い後、何度か二人で話したが、「足が不自由って言っても、日常生活には問題ないんでしよう？ 火傷だつて気にしませんよ」と言つて彼は笑つた。

あの事故のことを直接知らず、引き籠もつていた当時の自分を知らない人。そして、昔の明るかつた自分をまったく知らない人だから、逆にうまくやれるのかもしれない——白花はそう思うようにしていた。

ブルルルル——邸のガレージに車が入る音がして、白花はブラシをドレッサーに置いた。

(お父様のお帰りだわ)

時間は二十二時過ぎ。引退したといつても、元官房長官の清十郎に意見を求める政治家も多い。

そのため、洋館を改装したモダンで広い本邸内には、キッチンや主寝室以外にも、来客専用の応接間やゲストルームがあり、バスルームやレストルームは二階にだつて備え付けてある。そして洋館の奥には、昔ながらの日本家屋が続いているのだ。これは倉原家の長い歴史を物語っている。

いつ何時お客を連れてくるかもしれない清十郎の出迎えは必須。娘として、だらしな性格好はでない。

バスローブをドレッサーの椅子の背に掛けて、ワードローブから下着と藍色の五分丈カットソー、それからシフォンのスカートを取り出して着替え、すっぴんの顔にパウダーとリップをサツと引く。「はあ……」

本日何度目かになるため息が無意識にこぼれる。ため息の数だけ増えるのは、あの人への想いだ。

——会いたい、会いたくない。昔に戻りたい、戻れるわけがない。愛されたい、愛されるわけがない、でも……愛されたい。

白花は唇を引き結ぶと、部屋の電気もそのままに急いで一階に下りた。

「お帰りなさい——お、お父様!？」

スーツを霧雨で濡らし、顔を真っ赤にした清十郎が、巧に背負われて、「ぐおーぐおー」と盛大なびきをかいている。

そんな清十郎からプンと酒の臭いがして、白花は思わず顔を顰めた。

「ええっ、飲んでるんですか?」

「すみません。おとめしたのですが今日は前祝いだからと、後援会の会長と三軒はしごで……」

桜の花びらを肩に載せた巧は、申し訳なきような顔で頭を下げてくる。

肝炎を患つてから、清十郎は医者に酒を控えるように言われているのに、ちつとも言うことを聞かない。家では白花が酒類を絶対に買わないから、こうして外で飲んでくるのだ。

それにしても今日はだいたい飲んでようだ。明日が白花の結婚式だから、羽目を外したくなつたのだろうか。

(それだけ喜んでくれている、ってことなのかしらね)

とにかく巧に父を背負させたままにするわけにはいかない。

白花は一階奥、日本家屋のほうにある清十郎の寝室に巧を案内すると、雨に濡れている彼にタオルを渡した。

畳の上に無理矢理置いたベッドに清十郎を寝かせ、ネクタイやジャケット、ベルトを脱がせる。

清十郎のシャツのボタンを寛げながら、白花は静かに謝った。

「父が、ごめんなさい。巧さんにすっかり甘えて……」

多い時は一度に三十人以上いた清十郎の秘書も、今や巧しかいない。政界を退いた時点で、清十郎に秘書は必要ないからだ。

他の秘書は皆、市長選に出たり、他の議員の秘書になったりしているのに、巧は清十郎の側を離れない。それは、清十郎の後継者——白花の夫となる倉原蓮司の第一秘書になることが決まっているからかもしれないが。

彼が今やらされていることは、清十郎の運転手。そして雑用という名の介護だ。

ずっと清十郎に付き合われているから、自由な時間もほぼない。

そのせいか彼は、三十二歳になった今も独身だ。恋人の存在はわからないが、浮いた話は一度も聞いたことがなかった。

「いいんですよ。先生は、俺にとって親父おやじみたいなものですから」

そう言ってくれる巧は、笑顔はなくとも、とても優しい声だ。

ベッドを挟んで向かいにいる彼を盗み見るように少し顔を上げると、たまたまこちらを見ていたのだろうか……タオルで髪を拭いていた巧と目が合った。

(——っ！)

それだけで白花の鼓動は波紋を広げる。彼と、こんなに近い距離に来たのはいつぶりだろうか？いつも清十郎に付き従っている彼とは、二人つきりになることもない。白花から側に寄らない限り、彼が距離を縮めることはないのだ。

子供の頃は——あの事故の前は違ったのに。

あの事故は白花からいろんな物を奪った。

でも、この人にときめく気持ちだけは、今もなお、白花の中に深く深く残っている。

(ああ……好きだなあ……)

このままずっと、見つめ合っていられたら——

けれども先に視線を外したのは巧のほうだった。

「タオル、ありがとうございます。先生のジャケットはこっちに掛けておきますね」

「あ、ありがとうございます……」

巧の使ったタオルを受け取って、ドキドキする自分がいる。

彼は白花にスツと背を向けると、清十郎のジャケットを取り、皺しわにならないようハンガーに掛けてブラッシングまでしてくれた。が、そんな巧の背中を見ながら、白花の胸はチクンと痛む。

こうやって時々、彼に避けられていると感じることがある。

無理もない。先に避けたのは白花のほうなのだから。彼は仕事だから、ここにいるだけ。

白花に視線を向けられることすら、彼には迷惑なのかもしれない。(……わかってるの。でも、ごめんさい……巧さんが、好き……)

明日になれば、さして親しくもない男の妻にならなくてはならない。この家を出ることになる。巧と会う機会も今よりずっと減るのは目に見えている。

その前に一度でいい。たった一度でいいから、巧に女として愛されてみたい。今まで蓋ふたをしていたその想いが、今日に限って、——いや、今日だからこそ——堰せきを切ったようにあふれてくる。それが自分でもとめられない。

手を伸ばせば、ずっと恋してきた男ひとに手が届く。振り払われるかもしれないけれど——でもぎつと、今しかない。今しか……

白花は手の中のタオルをギュッと握りしめた。

(振り払われるなら……それでもいい)

振り払われたその瞬間だけでも、この人に触れられるなら本望ほんもちうだ。

女として見てもらえるかもしれない。

たとえそれが、一秒にも満たないわずかな時間だとしても。

熟睡している清十郎に布団を掛けて、白花と巧は部屋から出た。

「だ、巧さんっ！」

玄関に向かう巧の背中に声をかける。足をとめて振り返った彼に、白花は礼儀正しく頭を下げた。

「ありがとうございます。助かりました」

巧が小さく首を横に振った気配がする。

「先生の秘書として当然のことです」

「あ、あの……こ、これからのご予定は、おありですか？」

「これから？ いえ、ありません。帰って寝るだけです……？」

白花がこんなことを聞いたのは初めてだったからだろう。巧は少し戸惑った様子を見せた。

それとも、まだ用事があるのかと、面倒くさそうにしているのかもしれない。

今から自分が言うことは、彼を更に困らせるだろう。

(でも、今日だけ……一度だけだから——……)

身勝手になることを自分に許してしまえば、こんなにも気が楽になるのか。手を振り払われる瞬間さえも楽しみになるなんて思わなかった。

気持ちが悪くても男の人は女を抱けるといふ。

なら、ただの性処理としてでいいから、この身体を抱いてほしい。

ゆつくりと顔を上げた白花は、巧を正面から見つめた。

爽やかな印象が強かった昔より、精悍せいけんさが増した少し冷たい表情。

笑いかけてくれることはなくなっただけれど、やっぱり彼は、白花にとって特別な人だった。

「巧さん……わたしを……わたしを、だ、抱いてもらえませんか？」

「……………」

巧が眼鏡の奥の瞳でじっと白花を見つめてくる。驚きと困惑と……あとはなんだろう？ わからないが、目を瞬いた次の瞬間には、彼の眉間に深々と皺しわが寄っていた。

「白花さん……あなた、自分がなにを言っているのかわかっているんですか？ あなたは明日、結婚するんですよ!？」

呆れているのだろうか？ 巧らしからぬキツイ口調だ。軽蔑けいべつされたのかもしれない。

だが、それでも構わなかった。これはもう、叶わない恋なのだから。

「わかつて……います」

「じゃあ、どうして……」

理解できないと言いたげに、巧が両こめかみを押さえるように顔に手をやる。

ああ、彼の表情が見えなくなってしまう。ずっと見ていたかつたのに……

「お、思い出を……いただけたらと……」

好き……とは、言えなかった。今でも迷惑なことを言っている自覚はある。

「あの、か、彼女さんがいらっしやるなら……無理にとは……」

顔を覆っていた巧の手が下がる。彼は小さく息を吐くと、白花から目を逸らした。

「……恋人なんかいません」

（あ……いないんだ……）

彼のプライベートに少しだけ触れて、それだけで嬉しくなってしまう。

いや、違うか。

今、自分は、彼に愛されている女がいないことを喜んだのだ。なんて汚い心なのか。

「あの——」

「……わかりました。白花さんの部屋に行きましょう」

「!」

望んだ答えをもらったはずなのに、心臓は歓喜よりも緊張で高鳴った。

洋館の玄関ホールから、緩やかにカーブを描いた階段を上って二階に上がる。

四つ並んだ部屋のうち、一番奥が白花の部屋だ。

「ど、どうぞ……」

ドアを開けて巧を促す。

中に入った彼は、視線を一巡させてベッドに座った。

部屋に唯一あるドレッサーの椅子に座らなかつたのは、背凭せもたれに脱ぎっぱなしのバスローブが引っ掛かっていたからだろう。己の行儀の悪さが恥ずかしい。

ピンクのシートに包まれたベッドと、巧の黒いスーツのコントラストが不似合いなのに妙に艶なまめかしくて、彼の存在を色濃く感じた。

「白花さんの部屋に入るのは久しぶりですね」

「そう、ですね」

子供の頃は、清一と巧、そして白花の三人でよく遊んでいたっけ。

正確には、清一にからかわれた白花が巧に泣きついて、清一が笑いながら謝ってくるまでがセツト。

巧はいつも白花の味方で、清一がやりすぎるとすぐに間に入ってくれ、白花がぐずると気晴らしに外に連れ出したりもしてくれた。

兄よりも兄らしく、白花を可愛がってくれたのは巧。

彼との思い出は楽しいことしかない。今はもう懐かしいだけだ。

あの事故が壊したのは幸せだった時間だ。

清一は死に、白花は身体を損ない、巧は笑顔を消した。

「そんなところにいないで、座ってください」

ポンポンとベッドを叩かれて、ドキドキしながら巧の横に座る。

彼は白花がずつと持っていたタオルを無造作に取り上げ、バスローブの上にポンと置いた。そして、脱いだ自身のジャケツトを軽く畳んで脇に置き、白花の頭を包み込むようにそつと撫でてくれる。その手は昔と同じく、あたたかくて優しい。そのことがなんだか無性に切なくて、泣きたくなって、白花は唇を噛んだ。

「よしよし……どうしたのかなあ。マリッジブルー、かなあ……。結婚が怖くなりましたか？」

頭を撫でながら聞かれるが、うまく答えられない。

「白花さんは昔から、新しい環境に入る前はナーバスになっていたから。覚えていますか？ 小学校に入学したばかりの時、清一と俺に学校について来てって大泣きして、俺達ひと月くらい白花さ

んの学校まで送っていったんですよ」

こうやって昔話をして落ち着かせてやれば、「抱いてくれ」なんて馬鹿なことを言つたと、白花が思い直すと彼は思っているのかもしれない。

彼にとつて白花は、親友の妹で、幼馴染みで、妹分で、上司の娘で、無下にもできない厄介な存在なんだろう。たとえ、心の奥底では嫌っていたとしても。

巧の肩にコツンと額を載せてみる。男らしくも甘い、優しい匂いがした。

「大丈夫ですよ。なんにも心配なんかいらぬ。明日が一番、白花さんが綺麗な日だって、今日、先生が飲みながら話していました。白花さんのお母さんも、清一もきつと空から見てください。俺も……楽しみにして——っ！」

白花は無言で、巧の唇に自分のそれを押し付けていた。

明日の話なんかしてほしくない。楽しみだなんて尚更、言わないでほしかった。

生まれて初めてのキスは、ただ一瞬、触れ合うだけのぎこちないものになってしまったけれど、そこには白花の意志が確かにある。

「……どうして、俺なんですか？」

離れた唇が紡ぐ声は、さつきよりも硬い。

「……初めての男を……女は……わ、忘れないと、聞いたので……」

尻すぼみになりながら曖昧な答え方をすると、白花を映した瞳がわずかに揺れた。

「なるほど」

瞬きする間もなく押し倒され、身体がベッドにぼすんと沈む。無防備な白花を見下ろしながら、巧は眼鏡を片手で外した。

「……それはいいですね……魅力的だ」

「！」

苦悶の滲む表情で口の端を吊り上げる――

今まで見たこともない彼の表情に驚くのと同時に、唇が重なる。「あっ」と息を呑んだ時には、口内に舌が差し込まれていた。

「んっ！」

深いキスに呼吸の仕方がわからず、もがくように喘ぐ。

こういうキスがあることは知ってはいたが、いきなりだなんて。

巧は少し唇を離し、角度を変えてまた口付けてきた。

さつきより深い。今度は舌の腹を擦り合わせ、絡みながら扱かれてしまう。

舌が触れ合うことがこんなに気持ちのいいものだなんて知らなかった。

「はあはあ……はあはあ……ああ……はあはあんっ」

激しい……激しくて息ができない。でも、お互いの舌と吐息、そして唾液が絡み合っていくのがわかる。

（あ……わたし……巧さんに、キスしてもらってる……）

その事実だけで、歓喜に沸いた身体が異常に熱くなっていく。

ずっとこうしてほしかったのだ。

長年恋してきた人のキスが、こんなにも激しく、情熱的だなんて。それを知ただけでも、心が満たされていく。身体に感じる彼のぬくもりと重みが、これが現実だと教えてくれる。

巧は念入りに舌を絡ませながら、白花の身体にのし掛かり、服の上から左の乳房に触れてきた。

そして、そっと撫でるように円を描いてくる。

なんて優しい手つきなんだろう。胸が甘く高鳴る。

甘い吐息の裏側で、ぴちゃぴちゃ、くちゅくちゅと唾液のまざる音がする。

（好き……）

どれくらいキスしていただろう？

乳房の上で円を描いていた巧の手が、次第に下から揉み上げる動きに変わってきた。

「んっ……はあはあ……んっ、ん……んんん、んっ……はあはあ……」

（あ——これ、気持ちいい……）

じくじくとお腹の奥が疼いて、気持ちが昂る。

その時、カットソーの裾から巧の手が中に入ってきた。

「っー！」

ビクツと大袈裟なくらいに身体が跳ねて、キスの途中にもかかわらず顔を背ける。幸せの鼓動が、不安のそれへと変わる瞬間だった。

「待って！」

腹に触れる巧の手を、服の上から押さえる。
そこから上には、火傷の痕がある。

自分で見るのもいまだに苦痛なこの傷痕を、好きな人に見せるなんて。電気だって、こんなに
明々としているのに。

「か、身体は……見ないでください……ひどいから」

なにが——とは言わなくても、悲しいかなそこは伝わってしまう。

白花の上に覆い被さったまま、巧は落ち着いた声色で囁いてきた。

「なら、よしましう。あなたには、高辻さんがいるんだから。明日結婚するんですよ？ これ以

上は——」

「！」

高辻がいるなんて、巧だけには言われなくなかった。想いも身体も、高辻には捧げていない。

(わたしには、あなただけなのに！)

巧には初めから、白花を抱く気なんてなかったのかもしれない。彼にとつて、高辻は未来の上司
だ。キスだけでお茶を濁して、白花を説得するつもりだったのかも——

そう思ったら、白花は巧を押しつけていた。

上体を起こして、自分のカットソーとキャミソールを引っ掴み、一気に脱ぐ。

「白花さ——」

制止する巧の声も聞かずに、スカートやブラジャー、果てはショーツまで脱ぎ捨てる。

全裸になった白花は、涙目で巧を見据えた。

「わ、わたしは、高辻さんのものじゃないっ……！！」

誰のものにもなっていない自分を巧の目に晒す。

彼の目が焼け爛れた右胸に行くのを感じた。

「……ひどいでしょう？ おいやなら、そう仰って」

高辻のものだから抱けないと言われるくらいなら、焼け爛れた身体がいやだからと言われたほう
が千倍マシだと思っただのだ。

「……本気ですか……？」

呆れられてもいい。軽蔑されてもいい。今夜だけでいいのだ。そうしたらもう、ワガママなんて
言わないから。困らせることもしないから。

黙って頷いた次の瞬間、白花はベッドに押し倒されていた。

「じゃあ、脚を開いて」

じっと見下ろしてくる巧に、落ち着いた声で囁かれてドキツとする。自分から脚を開くなんて。

「恥ずかしい？ できない？ 俺を誘ったのはあなたなのに？」

試されている気がした。

言われた言葉の中に「本当に抱かれないのなら、できるはず」という彼の真意を感じ取れる。
(巧さんに抱いてもらえるのなら……わたし……)

なんでもしてしまう——

覆い被さってくる巧の身体の下で、白花は真っ赤になって震えながら、おずおずと脚を開いた。たったそれだけで息が上がって、手に汗が滲む。羞恥心から目を伏せた。

「……そうまでして、俺に抱かれないんですか？」

唇を噛んで、黙って頷く。

婚約者がいる身で言うことではないとわかっている。でも、初めては本当に好きな男に捧げたい。そう思うのは悪いことなのか？

白花は泣きそうになりながら巧を見上げた。

懇願の域にまで達した目に、憐れみでも覚えてくれたらいい。愛してくれとは言わないから、どうか今夜だけ——

「抱いてください……お願いします……」

巧は一瞬だけ苦い表情をすると、白花のお願いに応えるように唇を重ねてきた。柔らかく目を閉じると、上唇と下唇と交互に甘く食まれる。なんて優しいキスなんだろう。

柔らかくあたたかい彼の唇の感触や、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっとなぞられるリップ音にまじって、巧がワイシャツのボタンを片手で外す気配がする。抱いてくれる気になったのだろうか？

ゆつくりと唇が離れ、それを惜しむように目を開けると、白花の腰に跨がった巧が無造作にシャツを脱ぎ、均整の取れた上半身を惜しげもなく晒してきた。その様子を見つめて、うっとりとしたため息が漏れる。

(……綺麗……)

スーツの上からではわからなかった肩幅の広さや、胸の厚み、そして割れた腹筋に目が釘付けになって、白花の中の女が淫らに疼く。

この男がほしい。この男に抱かれない。この男に——

求める気持ちのままに黙って巧に手を伸ばすと、彼もまた無言で白花の上に重なってきた。

胸と胸、額と額をびつたりと重ね、抱きしめて見つめ合う。

磁石が引き合うように、自然に唇が重なった。

巧がねぶるように舌を吸ってくれるから、ぎこちないながらも白花もそれを真似してみる。

すると巧は、白花のこめかみ辺りから指を差し込んで、頭の丸みに沿って撫でてくれた。それが褒めてもらえているようで嬉しい。彼のぬくもりが触れ合ったところから伝わってくるのだ。

だんだんとキスが激しくなってくる。

巧は唇を噛みつくようにキスをしながら、白花の髪を両手で掻き回してきた。

(ああ、巧さん……好きです……ずっと、ずっと好き……あなただけ……)

六年前のあの日、もしも事故がなかったら。

パーティーを無事に終えて、白花は家族揃って家に帰っただろう。そして、留守中の報告のために事務所から戻ってきた巧をそっと庭に連れ出して、長年の想いを伝えただろう。そして彼は、白花の想いにどう応えてくれただろうか。こんなふうにはキスしてくれていたのだろうか——

彼のキスが情熱的であればあるほど、白花に「もしも」を考えさせる。

手に入らなかった未来は、現実よりも色鮮やかに美しい。

「ん……ああ……」

小さく声を漏らして息をつく。

ゆっくりと離れた巧の唇は、顎から首筋へと流れて、乳房に触れた。

左の乳房を揉みながら、爛れた右の乳房に舌を這わされて、ピクッと指先に力が入る。

だが巧は、犬や猫が傷口を舐めて治そうとするように、ゆっくりと丁寧に舐めてくれた。こんな醜い痕を、この人は舐めてくれるのか。

優しさが染みる。乳房を口に含まれて軽く吸い上げられただけで、恥ずかしいくらいにぶっくりと膨らんでしまったそれを、彼は味わうように舌で転がしている。

おそらく自分は、今後この傷痕を見るたびに、今日のことを思い出すのだろう。

優しく触って、こんなに丁寧にしゃぶって、慈しむように舐めてもらったことを、何度も何度も思い出す。そんな気がする。

傷付いた乳房も、そうでないほうも、巧は平等に揉んでしゃぶると、片手をゆっくりと肌に滑らせた。すでに開かれていた脚をそっと撫でてくる。

太腿の内側を伝った彼の指先は、そのまま上がって秘められた女の部分に触れてきた。

白花の顔に一気に熱が上がったのも束の間、巧の指が淫溝を撫でるように上下に擦ってくる。

好きな男に乳房を揉まれて吸われながら、そこを触られるなんて。気持ちよくて、奥からなにか湧き出てくる。吐く息に、甘さを帯びた声がまぎった。

「ん……ふ……ひう、ううう……あん……」

「駄目ですよ、白花さん。声は抑えて。明日お嫁に行くあなたが、俺とこんなことをしているって、先生に気付かれるわけにはいかないでしょう？」

そうだ、一階には清十郎がいる。だいぶ酔っていたし、しとしと雨も降っているが、白花が大声を上げればどうなるかわからない。

白花はそっと自分の口を手で押さえた。

「そう。そのまま声を抑えてくださいね。約束ですよ？」

巧は囁くと白花の淫らな穴に、指を一本、ぬるんと差し込んだ。

(っ!?)

突然の挿入に、息を吞んで目を見開く。生まれて初めてカラダの中を触られている。ヘンな感じだ。巧は挿れた指をゆっくりと抜き差ししながら、白花の胸の上で囁いてきた。

「中がキツイ。本当に初めてですね」

さっきまでしゃぶられていた乳房に、巧の息が当たってゾクゾクする。そのことに彼が気付いたのかはわからない。が、巧は自身の唾液に濡れた白花の乳房を、キュッと軽く摘まんできた。

「ひゃー！」

ピクンとカラダが反応して、中に埋められた巧の指を締め付ける。

「ああ……あ……あああ……」

(や、やだ……こんなっ……ヒクヒクしちゃう……)

初めての異物感に身体は敏感に反応する。緩急を付けて乳房を摘ままれるだけで、挿れられた

巧の指を、蜜路がぎゅぎゅと締め付けるのだ。まるで、あそこが意志を持って、巧の指をしゃぶっているみたいだ。それが恥ずかしいのに、気持ちいい。

ゆつくりと引き抜かれる指に媚肉をまんべんなく擦られて、白花はブルブルと震えた。くちよんつと軽い音を立てて、指が引き抜かれる。なのに疼きかとまらない。腰がガクガクする。むしろ、さつきよりも疼きが強くなっているような？

自分のカラダが示すいやらしい女の反応に、白花は戸惑いながら涙目になった。

「女は初めての男を忘れない、か。じゃあ、白花さんには、俺をしっかりと覚えていてもらわないといけませんね。俺がすることも——」

巧はそう言うと、白花の膝裏を抱え上げて、つま先をぐつと頭のほうにやった。

「えっ!? ひゃあああんっ!」

なにか起こったのかわからずに、目を白黒させる。

気付いた時には、白花の身体はほとんど二つ折りにされた状態だった。そして、ぱつくりと割れた秘裂を覗き込むように、巧の顔が迫ってきて——

(や、やだ、うそ! 全部見えちゃうっ!)

動揺したのも束の間、さつきまで指を埋められていた白花のいやらしい穴は、巧の舌によってれるーつと舐め上げられた。

「——!?!」

驚いて腰を引こうとしたが、そもそも浮いた腰に巧の両膝が差し込まれていて動けない。脚がバ

タつただけだ。

巧は白花の太腿の裏を両手で押さえ、伸ばした指先で花卉を左右に割り広げると、隠されていた敏感な蕾にじゅつと吸い付いてきた。

「はうっ!」

シャワーを浴びたばかりとはいえ、こんなことをされるとは思っていなかった。信じられない。巧が、あの巧が、自分のあそこにむしゃぶりついているなんて。

「ほら、声は駄目だったでしょう?」

顔を上げた巧に優しい声で叱られて、「ごめんなさい」と唇を噛む。

心臓は速さを倍にしたし、羞恥心は高まる一方。

でも抵抗できないし、したくない。羞恥心を上回るのは彼への想いだ。

この人に抱いてもらえるのなら、どんな恥ずかしいことをされても構わない。

白花は秘部を晒して膝を折ったまま、震える唇に手の甲を押し当てた。

そんな白花を見下ろして、巧はその目を細めてくる。外の雨音にまじって、彼の声があった。

「可愛く」

巧は押し上げる動きと、円を描く動きを交互に繰り返して包皮を剥ぎ、コリコリとした女芯を探り当てる。そして、その赤く尖った女芯の根元を重点的に擦ってきた。親指でくにくにくと押し潰されて、突き刺すような快感に苛まれる。

(ああっ! そこは……!)

白花は感じた声を呑み込んで、ぎゅっと目を閉じた。

「~~~~っ!」

「気持ちよさそうですね。入り口がヒクヒクしてる。昔は小さくて甘えんぼうだった女の子が、こんなにいやらしい女になるなんて思いませんでしたよ」

羞恥心に震えながら、窺うように巧を見上げる。自分を見下ろしてくる目と視線が絡んでゾクゾクした。ここに愛はなくても、恋して憧れ続けた彼が自分を見てくれているという事実、と興奮を覚えるのだ。

ずっと避けられていたぶん、歓びのほうが大きいかもしれない。

好きな男に触られて歓んだ女のカラダが、奥からじわりと汗をかく。

「ああ、もうぐちよぐちよ……」

巧はふたたび白花の中に指一本を挿れてきた。さっきよりもスムーズに入るそれに、媚肉が絡み付いていく。埋めた指をねつとりと抜き差ししながら、彼はもう一本、指を増やした。

「んんん……」

少し苦しい。先ほどまではなかった圧迫感に眉根を寄せる。内側からみっちり広がられる感覚に抵抗するように、ぎゅつぎゅつと蜜路が締まっていく。

ぐちゅ、ぐちゅつ、くちゅ——つと粘り気のある音が身体の中から響いてくる。恥ずかしさに涙が滲んだ。

「は……う……ううう……あ……」

巧の指の腹が、お腹の裏を押し上げながらそこを執拗に擦ってくる。それが気持ちよくて、押し殺した声が漏れてしまう。声は我慢しなければならぬのに。

（こ、声、駄目……巧、さんと、お約束……お約束したの……お約束し——）

背中がぞわぞわと粟立つていく。

蕾をいじられた時とはまた種類の違う快感が、白花の頭を真っ白にしていく。

「白花さん、ほら、見て」

突如、巧に呼ばれて薄く目を開ける。

視界に飛び込んだできたのは、埋めた指で白花の身体の入り口を開いた巧が、そこに尖らせた舌を差し込んでいるところだった。

「……ひいつつ……ん——ツ!?!」

指を二本挿れた白花の中に、巧の舌まで入ってくる。うねうねと蠢く舌は、お腹の裏を擦り回す指とはまったく違う動きで蜜路を広げ、奥へ奥へと侵入してこようとする。

「はっ、はっ、はっんぐ、た、巧さん、巧さ……あう、やあああ~~~~っ!」

中からせり上がってくる快感から逃れるように、ブンブンと強く首を振る。そうしたら、埋めた指とは反対の手の親指で、蕾をくにゅつと押し潰された。

「——ツ!!」

見開いた目からぶわつと涙があふれる。白花は跳ねるように大きく仰け反った。間髪を容れずに、じゅぼじゅぼと指が出し挿れされる。

(な、なに、これえ……、やだ、きもちいい、きもちいいの、どうにかなっっちゃうっ！)

頭の中を直接掻き回されているかのような強烈な快感。全身が発熱したように熱くなって、呼吸がめちやくちやになる。汗びっしょりで、もう、なにも考えられなかった。

「ひっ！」

いつの間にか、巧の舌は中から引き抜かれ、剥いた女芯に、乳首にしたように吸い付いている。じゅっつとそこを強く吸われたら、一瞬、視界が白く染まった。

「あ……あ、あ、あ………」

感じすぎた身体がくったりと弛緩して、だらしなく口が開く。そんな身体が倒れなかったのは、巧に太腿の裏を押さえつけられているから。

腰が浮くまで抱え上げられた脚をMの字に開いて、肩で息をする白花を巧が見下ろしてきた。

「すっかり女の顔をするようになったんですね」

冷やかな声にゾクゾクする。

結婚前夜に婚約者以外の男を誘う淫乱だと思われているのかもしれない。それでも構わなかった。

白花は淫らな蜜口から、とろとろの愛液を滴らせながら、巧に懇願した。

「お願い、です……抱いて……抱いて、ください……あなたがいい……巧さん、がいいの……」泣きながら手を伸ばす。

「おねがい……」

巧はどう思っただらう？ それはわからないが、彼は黙って白花の手に自分の頬を撫でさせた。

「……どうなっても知りませんよ」

ベルトを外した巧が、ストラップスの前を寛げる。そこからビュンと弾け出る物に息を吞む。

初めて見た男の人の物は、大きくて、赤黒い。

興奮してくれているのか、反り返ったそれは臍の辺りまである。青筋まで浮いて、途中が張り出していてごっごっしている。

白花が知る巧には不釣り合いで、怖いくらいだ。でもどうしてだろう？ じゅんつとあそこが濡れてしまう。

巧は生の漲りに手を添えると、ぱっくりと開いた白花の浮溝に充てがってきた。

「んっ」

想像以上に熱いそれが、白花の上をぬるぬると滑る。そのたびに、くちやつと粘っこい音が部屋に響くのだ。

「本当に挿れていいんですか？ ゴムはないですよ。仕事中に持ち歩く趣味はないので」

くぶつと蜜口に漲りの先がはまって、息を吞む。遮る物なく抱いてもらえるのかと思うと、それだけで嬉しい。

「いいの……」

白花がとろんとした目で見上げると、巧の喉がゴクリと鳴った。

巧の手のひらが、白花の太腿の裏を押さえつける力が強くなる。その瞬間、くぶぶつと巧の物が中に入ってきた。

「——!!」

ギチギチとした、激しい肉の引つ掛かりに目を見開く。

苦しい。蜜口が引き裂かれそうなくらい、みっちり引き伸ばされているのがわかる。指を挿れられた時には、あんなにぬるぬるのぐちよぐちよになっていたのに、初めての身体はまるで巧を拒むように硬く強張るのだ。

でも巧は、両手で花弁を割り広げ、真上から体重をかけてのし掛かるようにして、白花の中、奥に奥にと、漲りを捻じ込んでくる。

「う、ううう、あああ……」

痛い、苦しい、熱い——でも、幸せ。

声を押し殺し、ぼろぼろと泣きながら、身体を開かれる痛みと歓びにこらえる。

初めての痛みを巧に——本当に愛している男から与えられていることに心が震えた。

巧という男の身体が自分の中に入ってくることで、自分が女である意味を知ったのだ。

今までこの人に抱いてきた憧れやときめきが、愛液となって一気にあふれてくる。

(たくみ、さん——)

見上げると、目が合った巧が一瞬だけ眉根を寄せ、白花の目尻に口付け、涙を吸い取ってくれる。そして少しだけ鼻の頭を触れ合わせると、唇を重ねてくれた。

(ああ——……)

これは自己満足で、巧にしてみれば迷惑な話だったことは理解している。でも、勇気を出してよ

かった。ワガママを言っただけよかった。もう、この思い出だけで生きていける。

感情のままに、また涙が流れた。

「痛いですか？」

巧が心配そうな顔で覗き込んでくるから、白花は小さく首を横に振った。

「幸せで……」

白花がそう呟いて目を伏せると、頭を包み込むように巧に抱きしめられる。

「……俺もです……」

優しい嘘なんだろう。本気にははいけない——そんなことはわかっている。たとえポーズだとしても、この人はやっぱり優しいのだ。

(好き……)

言えない気持ちを呑み込んで、白花は巧の肩にコツンと額を当てた。

何度か頭を撫でてくれた彼の手のひらが、今度は頬に触れてくる。しつとりと唇を合わせて、巧が腰を揺すった。

「ん、んっ、んっ、ふ、あ……んっく……」

ゆったりとした彼のリズムに合わせて、舌を絡めながら小さく喘ぐ。

開かれたばかりの身体は熱くて、心臓は壊れてしまいうまくらいに高鳴っているのに、ひどく満たされている。好きな男と繋がれていることに、身体以上に心が満たされるのだ。

彼が動くたびに、中が擦られて身体が熱くなる。

痛いはずなのに、漏れる白花の声に甘さがまじってきた。

「は……はんっ……たくみ、さ……んっ！ ああっ……」

「白花さん……白花……」

唇を触れ合わせたまま名前を呼んでもらったら、泣きたくなるくらい嬉しくて、心も身体もぎゅんときめいてしまう。

「っ……！！ 駄目ですよ、そんなに締めたら……」

巧が少し頬を緩める。いつも硬い表情だった彼が、こんなに柔らかい表情を見せてくれるなんて！ 思わず見蕩れしていると、彼は白花の両の乳房を揉みながら、耳元に唇を寄せてきた。

「ゴム付けてないんですから、中に出してしまえますよ？」

直接的な言い方をされたからか、それとも生身の身体を繋げていることを思い出したからか、ぼっと赤面する。白花は視線を下げながら、もじついた。

「……中に、出して……ください……」

それがいけないことだということもわかっている。でも、自分が本当に望んでいることでもある。今日だけはワガママになると決めたから。

「……あなたは明日結婚するのに、そんなこと言っているんですか？」

巧は腰を揺するのをやめて、白花の顔を覗き込もうとしてくる。だが、ワガママになると決めたものの、白花も白花で自分が言ってしまったことのはしたなさに羞恥心を感じないわけではないのだ。だから白花は、真っ赤になった顔を両手で覆った。

「……お、お願いです……欲しいの……初めては全部、巧さんがいい……」

「そんな可愛いこと言うんだ？」

顔を覆う両手ごと、巧の手に包み込まれる。指先に彼の唇が触れる気配がした。

「じゃあ、明日の結婚、やめましよう？」

「え？」

なにを言われたのかもわからずに呆ける白花の顔から手を退けるなんて、きっと造作もなかっただろう。巧は白花の両手首をベッドに押し付けると、じっと目を見つめてきた。瞳の奥の、そのまた奥を覗くように。

「明日の結婚なんて、やめてしまえばいいじゃないですか。本当はいやなんじゃないんですか？ だったらやめましようよ」

巧の言葉を理解した瞬間に目を開いて、そのまま固まる。

(やめる？ 結婚を……?)

考えたこともなかった。いや、考えないようにしていた。なぜならそれは不可能だから。

清一を亡くした倉原家が新たな跡取りを迎え入れるためには、白花の婿とするのが一番いいのだ。

高辻が清十郎の義理の息子となれば、有権者や後援会も納得してくれる。

むしろ、それ以外の道がない。

なぜなら、高辻はもうすでに、倉原蓮司として立候補し、当選しているのだから。

「ね？ やめて俺と——」

「そ、それは……」

視線を逸らした白花が言えない言葉を呑み込む一方で、それを代弁してきたのは巧だった。

「できないんだ？」

「……………」

押し黙る自分を見下ろしてくる巧の目を、白花は見る事ができなかった。

「俺に処女差し出して！ 俺とこんなセックスして！ その翌日に、他の男と結婚するって言うんですかっ!？」

普段の話し方からは想像もできないような荒々しい口調で、彼は叫ぶ。一階にいる清十郎のことなんて忘れたかのようなその声は、あまりにも苦しく白花の胸の内側を引つ掻いた。

（わたしは……わたしは……）

巧は押さえつけていた白花の手首を離し、こめかみから指を差し入れると、髪を掻き回してぎゅうつと抱きしめてきた。

「——本当、悪い女ですね……」

視界に入ってきたのは、悲しそうに歪んだ巧の表情だった。

「たくみ、さ——やああっ!？」

白花に噛みつくようにキスしてきた巧は、そのまま荒々しく腰を振ってきた。

「~~~~っ!？」

鋭く押し込まれた漲りが、肉襞を強く擦りながら引き抜かれ、また問答無用で奥まで貫いてくる。

今までの揺さぶるような動きとはまったく違う、叩きつけるような乱暴な抽送に、処女を散らしたばかりの白花は目を見開くしかない。

彼は優しくしてくれていたのだ、今まで。

「う！ うんっ！ た、たくみ、さ、んんんっ、ま、まって、く、はげし、はげしいの……」

「わざと激しくしてるんですよ……白花さんの中をしつかり、俺の形に変えて、ぐちゃぐちゃに汚して、マーキングしとかないと、いけません、から、ね！ ほら、見なさい」

彼は白花の頭を手で起こして、ぬらぬらと光る肉棒が、女の穴を出入りしている様をわざと見せつける。

（ああ……入ってる、入ってる、巧さんのが、わたしの中に、いっぱい……ああ……）

根元まで挿れて、途中で引き抜いて、また挿れて。

これがセックス。巧とのセックス——

体重をかけて押さえつけながらゆっくりと抜き差しされれば、愛液は泡立ち、とろとろの中を掻き回される。ずぼつと奥の奥まで挿れられて、その圧で呼吸がとまった。

巧は奥のほうを念入りに何度か突いてから、今度は手前にあるお腹の裏側を執拗に擦ってくる。彼の太く張り出した部分が、引っ掛かりながら処女肉を味わうように捲ってくるのだ。

奥、奥、手前、手前、奥、奥、奥、奥、また手前——不規則に擦るリズムの中に、時々大きなストロークでガツンと突き上げられて、目の奥に白い火花が散る。

「はっ、あはああっん！ はあ——はあ——はあひっ！ ああん！ あっ、あっ、あんっ!？」

「さつきまで処女だったくせに、もうすっかり仕上がってますね。奥まで入る。ほら、びしょしょ。濡れまくり」

白花のいやらしい穴を指で広げながら、巧はそこを凝視する。大好きな男に、恥ずかしい処を全部見られてしまった。

身体の火傷も、身体の中も、全部。でもその事実が嬉しくて、心臓のドキドキはとまらない。もっと見てほしかった。

わたしを、覚えていて。わたしの身体だけでも、覚えていて――

「ああ。なんて締めりだ。気持ちいいですよ。吸い付いてくる。こんなに嬉しそうに俺のを咥え込んで。婚約者を裏切つて、俺とするセックスは気持ちいいですか？ そんなに俺に抱かれたかったですか？ 俺に中出しされたいんですか？」

「はい……うれ、し……きもちい、きもちいです……すぐく……たくみさん……たくみさん、ああ、ああ……う、ううう……おねがいます……わたしのなかに、ください……」

ずっとこうされたかった。今、その望みが叶っている。

巧に話られようと、嘲笑われようと構わない。

「……明日結婚するくせになんでそんな顔するんですか！ くそっ！ 中に射精してやる！」

巧は吐き捨てる、抽送のスピードを上げた。彼のリズムに合わせて揺れる乳房は、熱い手のひらで揉みしだかれ、乳房は吸い上げられる。火傷の痕も丁寧に舐め上げられ、強く吸われた。

「は……白花……」

しゃぶり尽くした乳首を口から出して、今度は唇を吸われる。舌でこじ開けられた白花の口の中に、巧のそれがぬるりと入ってくる。

「ん、んっ、んんんっ！」

熱烈に舌を絡ませながら、下肢では繋がった巧が絶え間なく白花の中に出入りしている。

肌と肌がぶつかる音とキスの音、そして二人の荒い息遣いが部屋に響く。

巧に激しく揺さぶられた白花の身体は、ますます濡れた。太腿もシートもびしょびしよで、巧が動くたびににはしたくない音がする。

巧の目が見たこともないほど、欲望に燃えていた。

愛する男が、この身体を貪ってくれている――その事実だけで、幸せだった。

「あっ！」

目の前にパツと閃光が走って、背中がピンと突っ張る。その瞬間、身体の奥でなにかが弾けた。ドクドクと熱いものが何度も分けて注がれているのがわかる。

抵抗できない。むしろ、気持ちよくて身体が弛緩していく。そんな中で子宮だけが痙攣していた。

「は……っ、は……っ、は……」

肩で息をしながらぐったりと横になる白花の膝を、巧はベッドに付くほど割り広げた。

「ほら、白花さん……見て……」

脱力した身体に鞭打って臉を持ち上げる。

白花の中に深々と突き刺さった漲りを、巧がゆっくりと時間をかけて引き抜くところだった。

巧が身体から離れた瞬間、蜜口からくぼっと白い射液があふれ出てきて――
「あ………」

身体の中で感じたあの熱は、彼に中で出されていた時の熱なのか。こうやって目で見ると、強い満足感が胸に広がる。

白花がホッと息をつくとき、射液で満たされた蜜路にふたたび巧の漲りが捻じ込まれた。

「ああ！」

泣きながら目を見開く。

硬い。出したばかりなのに、ちっとも衰えない太いそれに、ごしごしと乱暴に中を擦られる。まるで、愛液と射液を中で掻き混ぜられているみたいだ。

巧は踊るように腰を使って、太い雁で肉襦を捲りながら一番奥を突き上げた。

「あ、ああ………」

子宮が女の悦びに震える。

「まだ終わりませんよ……終わるわけじゃないでしょう？ あいつと結婚する前に、あなたの身体、中から全部、俺ので汚してあげます……洗っても取れないように………」

巧は、快感に涙ぐむ白花の頬をひと撫でしてくる。その手は昔とにも変わらない。泣きじやくる白花を慰めてくれていた、あの時のままだ。

彼は雨がやむ明け方近くまで、何度も何度も白花を抱いた。

自分からはしたなく脚を広げさせ、時には雌犬のように四つん這いにしてうしろから貫く。

そうしてたつぷりと中に射精した。

翌日――四月一日。結婚式当日、朝。
「おはようございます！ 白花さん！」

白花と清十郎を倉原の邸に迎えに来たのは、婚約者の高辻蓮司、その人であった。

無造作に七、三に分けたヘアスタイル。街頭演説のせいか浅黒く日焼けしており、キリッとした目鼻立ちと、白い歯が特徴的な男だ。学生時代はサッカーをしていたそうで、背は高く運動神経抜群、と聞いている。

政治家になるルートにはいくつかあるが、秘書として下積みを重ねる者が多い中、高辻は松平政経塾を卒業後、即、神奈川県市の市長選に最年少出馬。当時はかなり話題になった。フレッシュさとクリンなイメージで見事当選。そこで清十郎の目にとまったのだ。子育て支援事業と介護支援事業の両立を掲げ、市長として四年の任期を経て以降、今度は清十郎の後押しで国政へと出馬し、現在が衆議院議員一年目。

実を言えば、清十郎の目にとまらなければ、高辻が国政へ打って出るのは難しかったかもしれない。それがわかっているからこそ、彼は自分を拾ってくれた清十郎を大変に尊敬している。

時々酒を飲みすぎる清十郎を「先生のお身体に障ります。国の損失です！」と、大袈裟に窘めて